

I 調査研究主題の設定及び調査研究内容

1 調査研究主題

家庭科技術検定の社会的評価を高めるために

～ 質の向上と4級受検者数の増加を目指して ～

2 主題設定の趣旨

家庭科技術検定を運営してきた財団法人全国高等学校家庭科教育振興会は、平成23年度に公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会として新たにスタートした。全国高等学校家庭科教育振興会が公益法人化したことにより、技術検定の実施に当たっては、公益性、検定内容の質の確保、評価の透明性など、一定の条件が付されることとなった。

そこで、技術検定調査研究委員会では次の調査研究を行ってきた。

(1) 平成24・25年度 「公益財団法人認定に伴う家庭科技術検定の運営について」

- ① 被服製作及び食物調理技術検定並びに保育技術検定の全てに関わる検定代表理事校の一元化について必要性を理解する意見が多い一方で、事務量の負担が増加することへの不安の声も寄せられた。
- ② 平成32年度以降の一元化に向けての試行について
試行県による試行を実施・検証し、円滑な制度改正等を行うこととし、その状況を他都道府県に広く周知する。

(2) 平成26・27年度 「家庭科技術検定の社会的評価を高めるために」

- ① 家庭科技術検定の社会的評価を高めるための取組について
教員から「進学や就職において家庭科技術検定の合格者を評価して欲しい」「家庭科技術検定の社会的評価を高めて欲しい」などの意見や、国の動向を見据え、多面的な評価として家庭科技術検定の社会的評価の向上に向けた取組について、検定実施校・検定代表理事校・本部事務局ができる具体的な方策を提案した。
- ② 家庭科技術検定一元化の円滑な実施に向けた検定代表理事校の在り方について
検定代表理事校一元化への円滑な移行に向けての諸課題について改善方策を提示し、平成29年度からの試行、そして平成32年度からの家庭科技術検定一元化につなげるようにした。

また、平成28年3月の「高大システム改革会議」「最終報告」では、「多面的な評価の充実として、学習成果を多面的に評価するツールとしての各種検定試験等の活用」を挙げている。家庭科においては、技術検定がそのツールになりうるよう、より質の向上が求められていると考える。一方で、受検申込者（被服製作・食物調理）数の経年変化をみると、昭和45年には約44万人、平成元年には約52万人まで受検者数が増えたが、その後は、1級と2級の上位級では大きな変化が見られないものの、基礎となる4級の減少率が大きく、ピーク時に比べ、被服製作が6分の1、食物調理が3分の1という状況である。ある程度の検定受検者数があることは、社会的な評価を高めるためにも必要である。本検定では上の級受検にはすぐ下の級合格が条件となっている。これらのことから、基礎である4級の受検者が減った原因を探ることが必要である。

以上のことを踏まえ、家庭科技術検定の社会的価値を高めるために質の向上を図ることと、基礎となる被服製作と食物調理の4級受検者を増加させるための手立てについて調査研究をした。また、各校での取り組みの参考となるよう工夫した実践例について紹介し、家庭科技術検定の活用と促進の手立ての方策を探ることとした。

3 調査研究内容

- (1) アンケート調査「全国高等学校家庭科技術検定振興のための調査について」
- (2) 家庭科技術検定4級実施の工夫した実践例

Ⅱ 調査研究委員会活動

1 調査研究期間

平成28年6月～平成30年3月

2 調査研究委員

<平成28年度>

村上 礼子 (宮城県松島高等学校長)
鈴木 慈 (山形県立天童高等学校長)
石川 薫 (埼玉県立鴻巣女子高等学校長)
渡辺 美智子 (岐阜県立大垣桜高等学校長)

<平成29年度>

村上 礼子 (仙台市立仙台高等学校長)
鈴木 慈 (山形県立山形北高等学校長)
石川 薫 (埼玉県立鴻巣女子高等学校長)
渡辺 美智子 (岐阜県立大垣桜高等学校長)

<事務局担当>

加藤 路子 (事務局長)
永原 邦代 (主幹)

3 平成28年度調査研究委員会活動

- (1) 第1回調査研究委員会 (平成28年6月20日)
 - ①調査研究の進め方 (年間計画)
 - ②技術検定を取り巻く課題
 - ③調査研究テーマ設定
 - ④調査研究方針及び内容
- (2) 第2回調査研究委員会 (平成28年9月27日)
 - ①今年度の研究の進め方
 - ②アンケート調査の内容
 - ③秋季研究協議会 (青森大会) 中間報告について
- (3) 第3回調査研究委員会 (平成28年11月21日)
 - ①アンケート調査対象校
 - ②アンケート調査内容
 - ③研究調査の進め方
- (4) 第4回調査研究委員会 (平成28年12月27日)
 - ①アンケート調査内容について
 - ②今後の進め方 (次年度に向けて)

4 平成29年度調査研究委員会活動

- (1) 第1回調査研究委員会 (平成29年7月10日)
 - ①29年度年間計画
 - ②報告書の内容・構成・提言の方向性
- (2) 第2回調査研究委員会 (平成29年8月28日)
 - ①アンケート結果の分析
 - ②秋季研究協議会 (愛媛大会) 中間報告について
- (3) 第3回調査研究委員会 (平成29年11月13日)
 - ①報告書の内容・構成
 - ②報告書作成までのスケジュール
- (4) 第4回調査研究委員会 (平成30年1月16日)
 - ①報告書内容検討

Ⅲ 調査研究

1 アンケート調査による「家庭科技術検定の社会的評価を高めるための取組について」

(1) アンケート調査の概要

〔調査期間〕

平成29年1月20日（金）～2月24日（金）

〔調査依頼先〕

- ① 依頼先 次の該当校を無作為抽出
ア 被服製作・食物調理の4級 両方又はいずれかのみ実施校
イ 被服製作・食物調理の4級 未実施校

② 依頼数

	依頼数	回答数	回答率
総依頼数	730校	467校	63.9%
ア 実施校 (被服製作・食物調理の4級 両方またはいずれかのみ実施校)	380校	262校	68.9%
イ 未実施校 (保育実施校19校含)	350校	205校	58.6%

- ③ 回答者 全国の高等学校の家庭科教員

〔調査内容〕

(詳細は、次頁参照)

- ① 貴校の状況
- ア 学科
 - イ 家庭科技術検定実施の有無
 - ウ 受検者
 - エ 指導者
- ② 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4級実施困難な理由
- ③ 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4級指導に取り組むために工夫できること
- ④ 家庭科技術検定の目的や効果

【アンケート質問用紙】

全国高等学校家庭科技術検定振興のための調査について

下記の設問に対し、該当する回答を回答用紙にご記入ください。

1 貴校の状況について、教えてください。

(1) 構成する学科について、該当する番号で教えてください。7を選んだ場合は、具体的に記入してください。

- | | | | |
|------------|-------------|-----------|------------|
| 1 普通科 | 2 専門学科 | 3 総合学科 | 4 普通科と専門学科 |
| 5 普通科と総合学科 | 6 専門学科と総合学科 | 7 その他 () | |

(2) 家庭科技術検定4級実施について、次のA～C-エの家庭科技術検定について、①実施の有無 ②受検者 ③指導者について、回答語群から該当する番号で教えてください。ただし、①で2(無)と回答した場合は、②と③は空欄のままにしてください。また、②で6を選んだ場合は、具体的に記入してください。

- | |
|---|
| A 被服製作技術検定、B 食物調理技術検定、C-ア 保育技術検定 (音楽・リズム表現)、
C-イ 保育技術検定 (造形表現)、C-ウ 保育技術検定 (言語表現)、C-エ 保育技術検定 (家庭看護) |
|---|

〈回答語群〉

- | |
|---|
| ① 1 有 2 無 |
| ② 1 1年生全員 2 2年生全員 3 3年生全員 4 科目履修者(その科目名)
5 部活動等一部の生徒 6 その他 () |
| ③ 指導者 1 教諭 2 講師 |

2 家庭科技術検定(被服製作・食物調理)4級の導入が困難な学校があります。現在、家庭科技術検定を実施しているか否かにかかわらず、その理由と思われるものをすべて選んで番号で教えてください。また、10を選んだ場合は、具体的に記入してください。(複数回答可)

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 家庭科教員が技術検定を知らない | 2 受検の手続きがわからない |
| 3 指導の仕方がわからない | 4 書類作成が煩雑である |
| 5 検定料がかかる | 6 家庭科教員が必要性を感じていない |
| 7 一人で審査をするのが難しい | 8 指導の時間が不足している |
| 9 試験の時間の確保が難しい | 10 その他 () |

3 家庭科技術検定(被服製作・食物調理)4級を現在、実施しているか否かに関わらず、技術検定の指導に取り組むために工夫できることについて、下記の例を参考に具体的に記入ください。

〈 参考例 〉

- 基礎・基本となる4級は家庭基礎であっても定着させたい内容なので、授業内容に技術検定内容を教材として取り上げ、検定そのものは、長期休業日、週休日等を利用して行っている。
- 一斉に授業等で指導することは難しいので、部活動等で取り組ませている。
- 受検希望者を集めて、課外学習のような時間設定を行って、取り組ませている。

4 家庭科技術検定(被服製作・食物調理)の目的や効果について、あてはまるものをすべて選んで番号で教えてください。また、13を選んだ場合は、具体的に記入してください。(複数回答可)

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1 知識・技術が定着する | 2 学習意欲が高まる |
| 3 忍耐力、根気強さが高まる | 4 集中力、段取り力、見通しを持つ力が高まる |
| 5 合格によって達成感、成就感が得られる | 6 合格によって自己肯定感が高まる |
| 7 生徒同士の連帯感が生まれる | 8 家庭での会話や実践が増える |
| 9 家庭科に興味・関心が湧く | 10 生活の自立の一助となる |
| 11 検定上位級を取得し、就職や進学を有利にする | 12 教師の指導力が向上する |
| 13 その他 () | |

5 技術検定4級実施のために、内容や手続き等についてご要望がありましたら、ご記入ください。

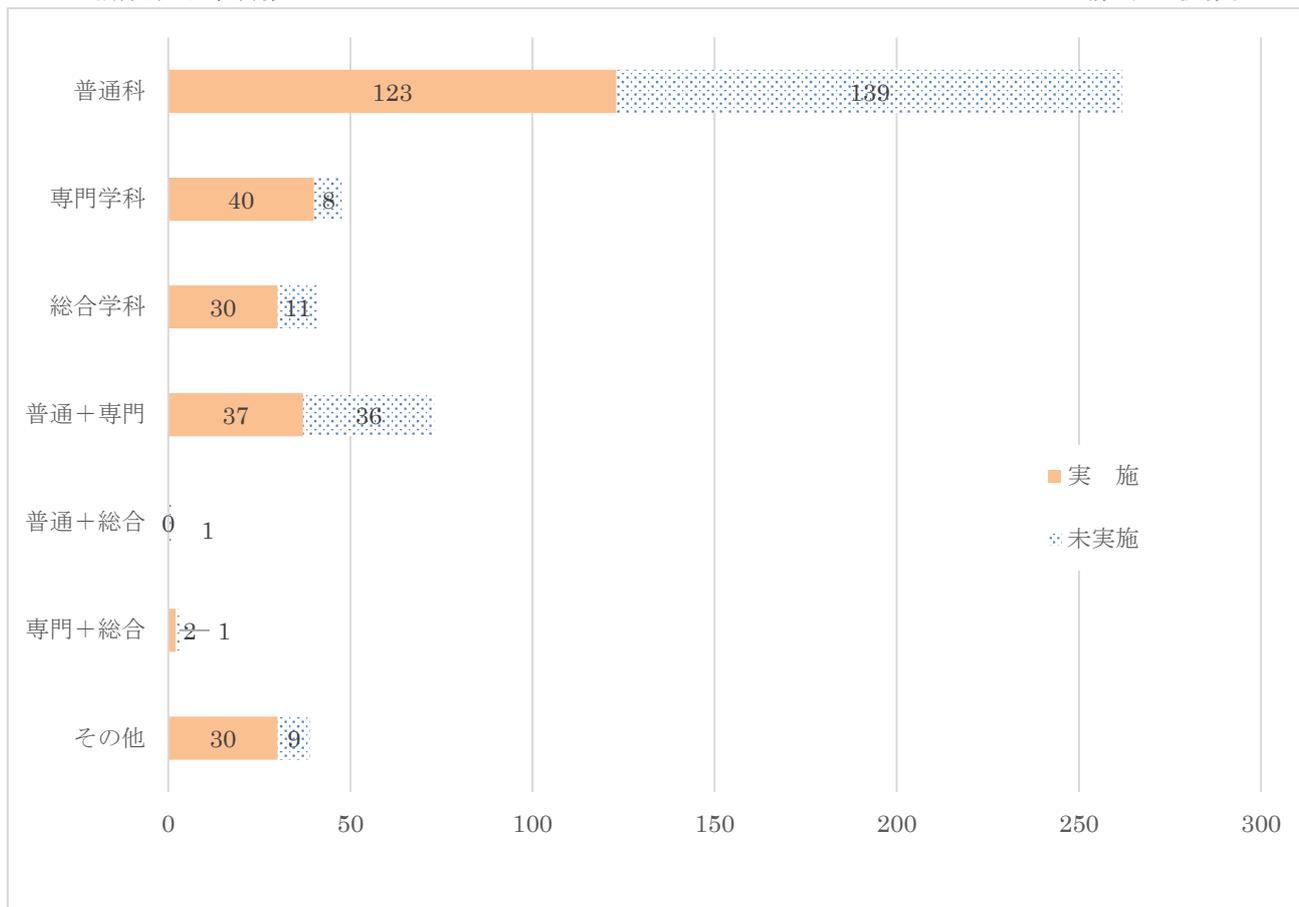
☆ご協力ありがとうございました。

(2) アンケート調査の結果

① 回答校の状況

ア 構成する学科数

(数字は校数)



* 「専門」は農工商等

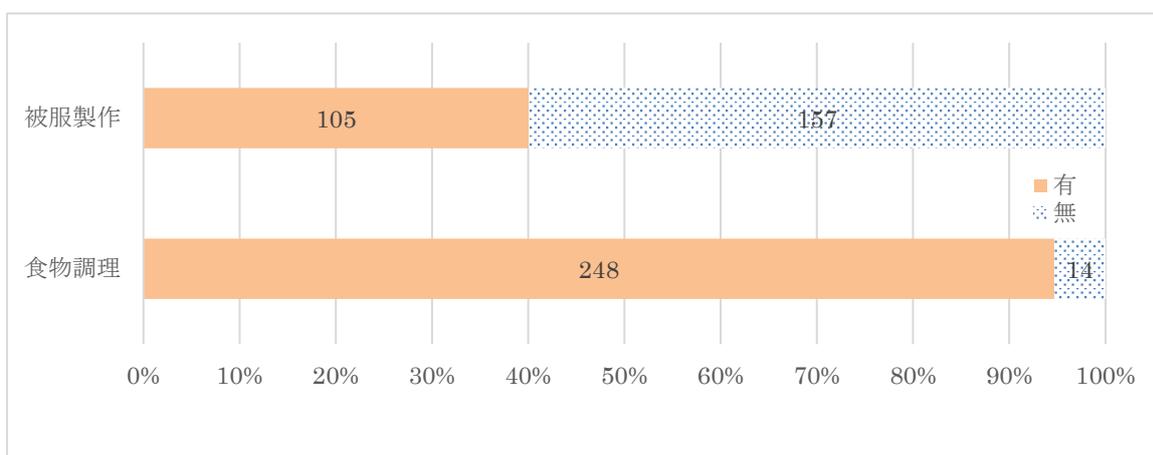
「その他」の主な内容

* 特別支援学校 等

イ 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4級実施校における実施種目

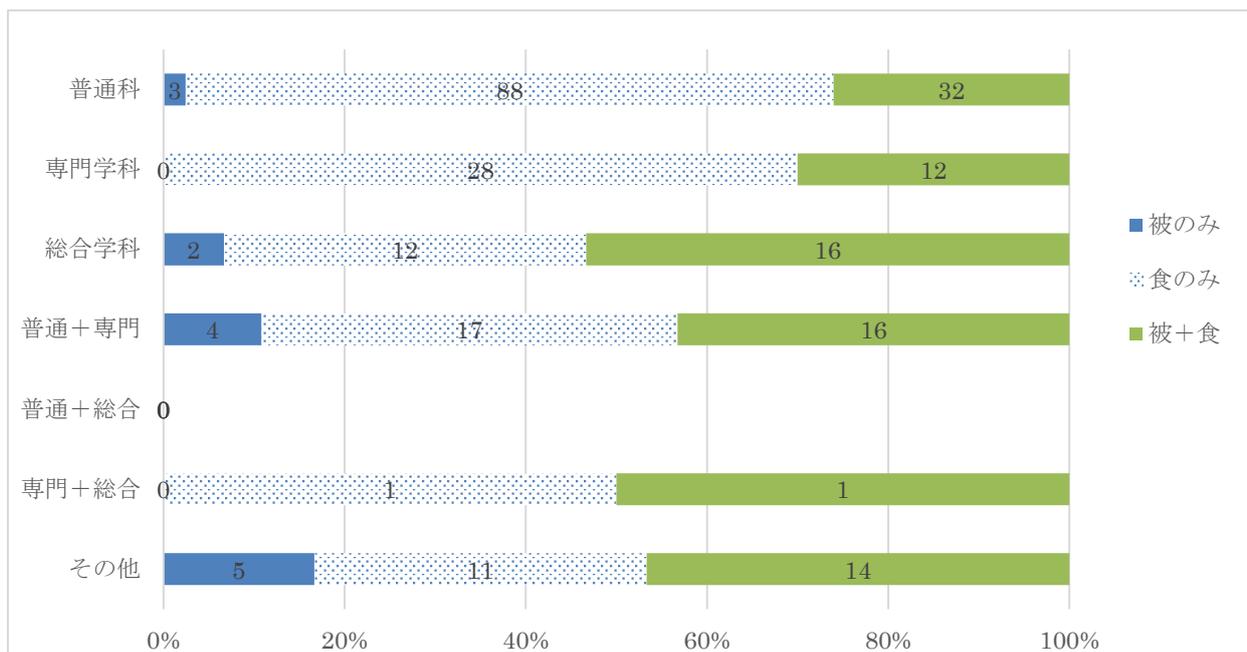
i 種目別実施割合

(数字は校数)



ii 学科別種目ごと実施割合

(数字は校数)

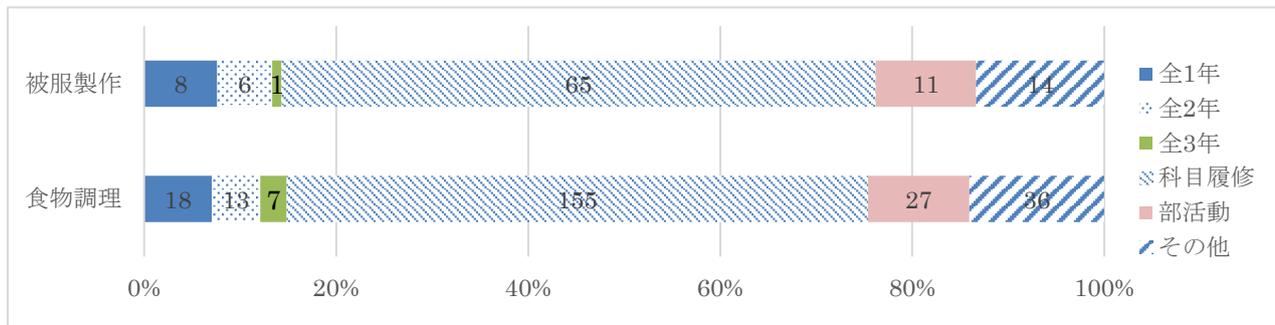


「その他」の主な内容

* 特別支援学校 等

ウ 種目別受検者状況の割合

(数字は校数)

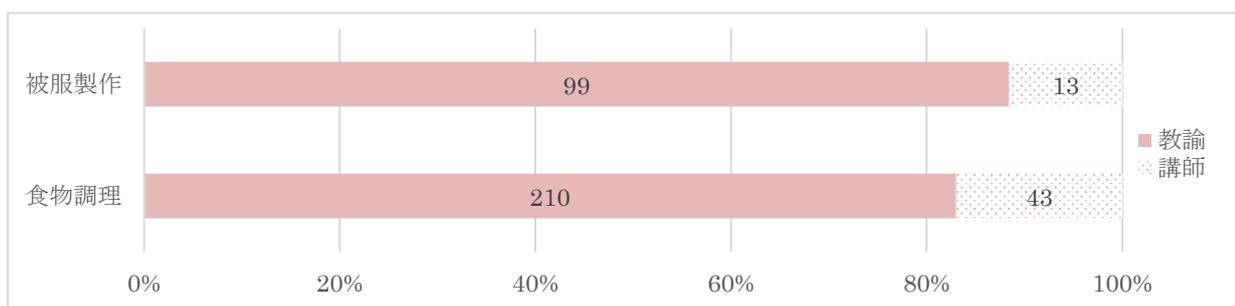


「その他」の主な内容

* 希望者

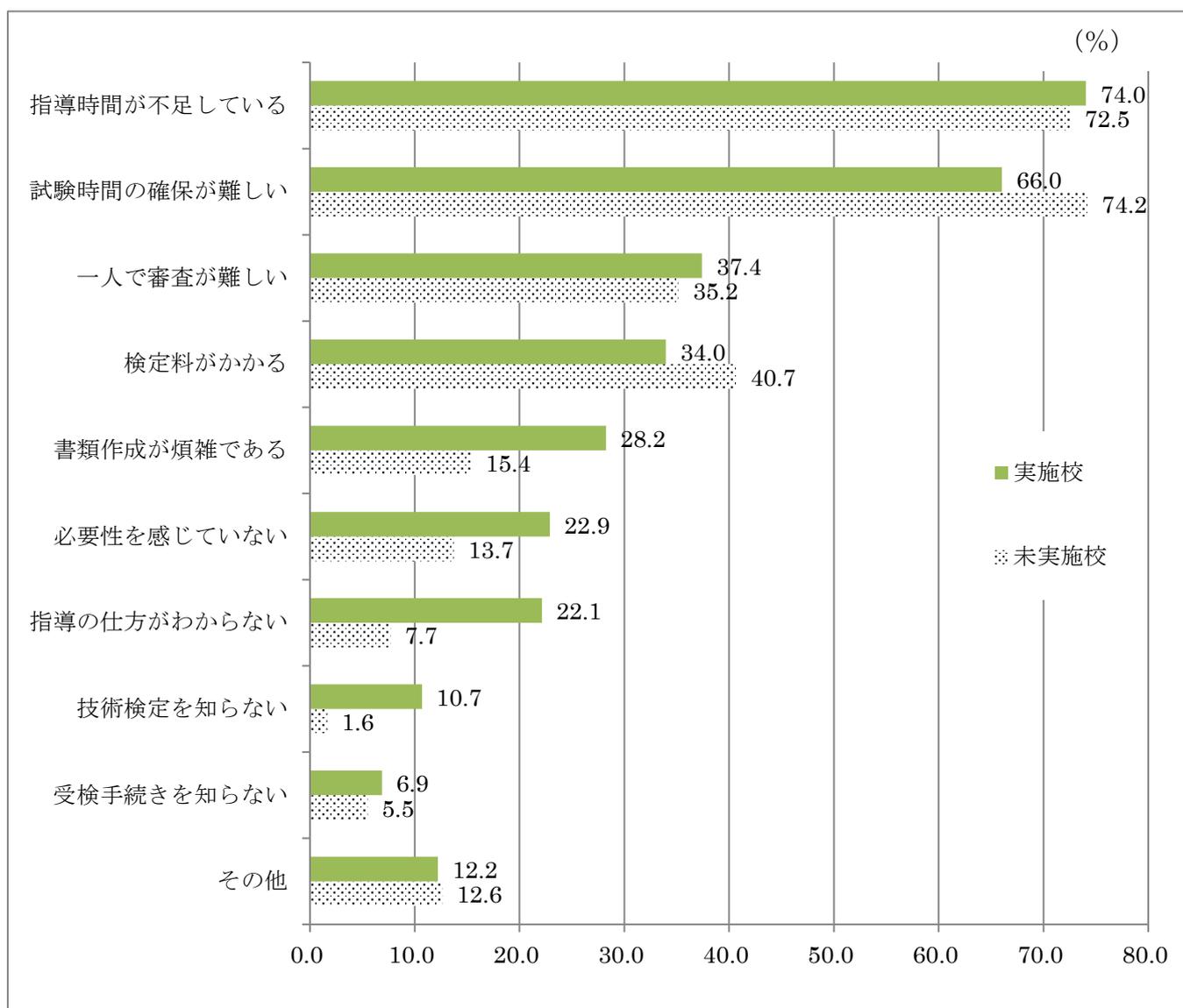
エ 指導者

(数字は校数)



② 家庭科技術検定（被服製作・食物調理 4 級）実施困難な理由

（選択肢の中から、複数回答可）



「その他」の主な内容

- * 4級では、調査書に記載できない
- * 家庭科技術検定の認知度が低い

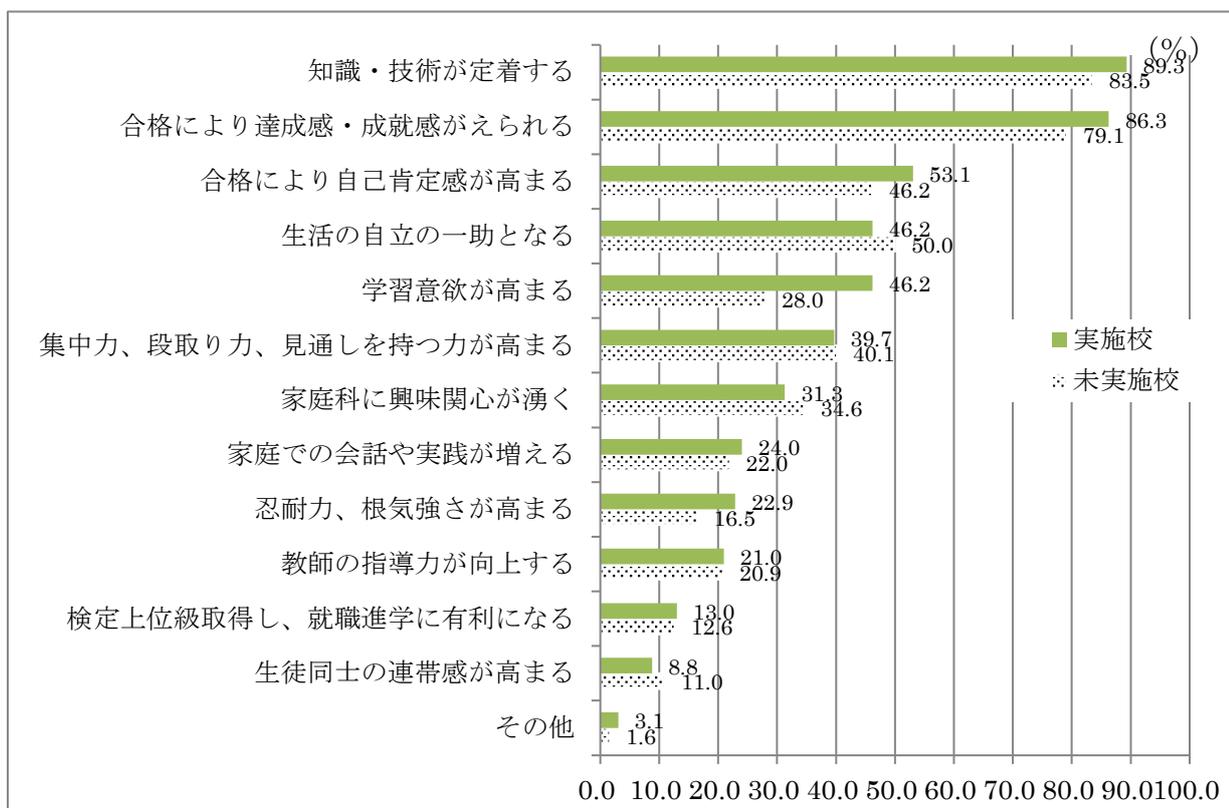
③ 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4級指導に取り組むための工夫

(件数)

実施校	未実施校
○授業（選択科目含む）で内容を取り上げる (117)	○授業(選択科目含む)で内容を取り上げる(51)
○部活動や課外で取り組む (48) 〈内訳：部活 16+課外 32〉	○部活動や課外で取組む (67) 〈内訳：部活 23+課外 44〉
○少人数で取組む (6)	○少人数で取り組む (1)
○その他 ・わかりやすい見本を作る ・学習させたい領域をレジュメに書き出し配付する ・毎年同じ物を使用し、印刷ロスを防いでいる ・長期休業中に練習をさせる ・生徒を評価の際に補助員になってもらう ・作品の段階見本等を作り提示する ・考査期間中（の午後等）を活用する	○その他 ・長期休業中に取り組む ・教員が研修会や評価会などに参加する ・検定の効果を生徒に伝える ・負担軽減の方法を提示する ・校内や地域に検定について広める

④ 目的や効果

(選択肢の中から、複数回答可)



「その他」の主な内容

- * 家庭科でどのような指導をしているかアピールになる
- * 基本的な知識や技術の到達目標が明確で評価が公正・平等におこなわれ、生徒にとって目標にしやすい

⑤ 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4級実施のための要望

(件数)

実施校	未実施校
<p>1 事務手続き等について</p> <p>○書類作成の簡素化 (27)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入力しやすい様式、Web ページから様式のダウンロードや電子申請の充実をしてほしい ・振り仮名や生年月日をなくしてほしい ・報告書様式を毎年変更しないでほしい <p>○合格証書 (12)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本部で作成してほしい ・簡素化してほしい <p>○実施諸費 (17)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼロ会計は大変である ・実施諸費の手続き（報告等）が大変である（失くしてほしい、受検生が少ないと不足、材料費の確保） <p>○その他 (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員一人では煩雑である 	<p>1 事務手続きについて</p> <p>○書類等手続きを簡素化してほしい (3)</p> <p>○検定料金を値下げし、手ごろな価格にしてほしい (3)</p> <p>○その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間を通じて受検できるようにしてほしい ・検定会場を外部化してほしい ・合格者名簿と合格証書を本部で一括作成してほしい ・検定案内文書を全学校へ配布してほしい
<p>2 検定内容について</p> <p>○被服4級 (8)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭基礎で挑戦できる内容にする ・実用性や家庭生活で使用できる作品にする ・時間が短い ・基礎知識を加える <p>○食物4級 (6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切り方を固定化する ・ハードルを下げる ・もう少し難しくする ・きゅうりの安価な時期に実施する <p>○検定レベルについて (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3級より指導が大変である ・4級と3級の差が大きすぎる（4級は生活者として身につけていくものか） <p>○その他 (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3級からにして欲しい 	<p>2 検定内容について</p> <p>○内容にとらわれず、実施校に適した内容で行う</p> <p>○被服の問題にデザイン性を持たせる</p> <p>○食物調理課題用の食材が高価なので安価な食材で実施する</p> <p>○生徒に材料費の負担をさせない</p>
<p>3 その他</p> <p>○検定意義について、社会的に評価・認知されるようにしてほしい（実施しやすいよう、管理職や教職員を納得させる意義づけを）</p> <p>○その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検定料を値下げする ・材料費がかかる 	<p>3 その他</p> <p>○検定日の審査員が不足している。一人では負担が大きい</p> <p>○指導者向け講習会を実施してほしい</p> <p>○大学進学に有利に働くようにしてほしい</p> <p>○その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受検用教材、DVDの無料配信、動画配信をしてほしい ・生徒の声、具体例をHPに掲載してほしい

*ゼロ会計とは、公益財団会計の特徴として「不足や残金がないように執行すること」。

(3) 分析・考察

① 回答校の状況

ア 構成する学科

回答校 467 校の構成する学科については、普通科が 262 校（約 56%）、専門学科が 48 校（約 10%）、総合学科が 41 校（約 9%）、普通科と専門学科併設が 73 校（約 16%）、普通科と総合学科併設が 1 校（0.2%）、専門学科と総合学科併設が 3 校（約 0.6%）、その他が 39 校（約 8%）であった。

なお、「専門学科」は農業・工業・商業等に関する学科であり、「その他」は特別支援学校等である。

イ 検定実施校における実施種目

学科ごとの検定 4 級のみ実施の割合は、普通科が 123 校（約 47%）、専門学科が 40 校（約 83%）、総合学科が 30 校（約 73%）、普通科と専門学科併設が 37 校（約 51%）であった。専門学科や総合学科では約 70%以上の学校で実施しているが、普通科では約半数弱の実施にとどまっている。

検定 4 級のみ実施校のうち、「被服製作」を実施している学校は約 40%、「食物調理」を実施している学校は約 95%、「被服製作」と「食物調理」の両方を実施している学校は約 35%であった。

「被服製作」を実施している学校の多くは「食物調理」も実施している。

ウ 受検者

「被服製作」の検定 4 級受検者の状況は、1 年生全員が 8 校（約 8%）、2 年生全員が 6 校（約 6%）、3 年生全員が 1 校（約 1%）、科目履修生徒が 65 校（約 62%）、部活動等一部の生徒が 11 校（約 10%）であった。「食物調理」の検定 4 級受検者の状況は、1 年生全員が 18 校（約 7%）、2 年生全員が 13 校（約 5%）、3 年生全員が 7 校（約 3%）、科目履修生徒が 155 校（約 61%）、部活動等一部の生徒が 27 校（約 11%）であった。学年単位での受検は両検定とも約 15%であり、「フードデザイン」や「ファッション造形基礎」などの選択科目履修生徒の受検が 60%以上と最も多い状況であった。部活動等を活用した受検も約 10%あった。なお、一つの学校でも、科目履修と部活動など、複数の機会を設定しているケースもある。

エ 指導者

検定 4 級指導者については、「被服製作」では教諭 99 人、講師が 13 人、「食物調理」では教諭が 210 人、講師が 43 人であった。8 割以上は教諭が指導しているが、中には教諭と講師の両者が指導している学校もあった。

検定実施校における実施種目では、「被服製作」よりも「食物調理」を実施している学校が多い。また、受検者は「被服製作」と「食物調理」ともに同じような傾向であり、学年単位での受検に比べ科目履修生徒の受検が多いことがわかる。

② 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4 級実施困難な理由

検定 4 級のみ実施困難な理由として、現在実施しているか否かにかかわらずその理由と思われるものを複数回答してもらったところ、「指導時間が不足している」「試験時間の確保が難しい」が、実施校・未実施校ともに、約 70%と多い結果であった。このことから、実施の有無にかかわらず、時間確保が大きなポイントとなっている。

次に、審査の困難さ、検定料、書類作成の煩雑さ、必要性を感じない、指導方法がわからないとの回答が多くあった。実施校を増やすためには、検定内容や指導方法の周知とともに、手続きの簡素化を図って、「実施してみよう」との思いをよりもてるような取り組みも大切である。

③ 家庭科技術検定（被服製作、食物調理）4級指導に取り組むための工夫

検定4級の指導に取り組むための工夫について、現在実施しているか否かにかかわらず具体的に回答してもらったところ、実施校・未実施校とも、「授業（選択科目含む）で内容を取り上げる」や「部活動や課外で取り組む」が多くあげられた。

実施校では、多忙な日々を送りながらも、わかりやすい段階見本を作成したり、放課後等を活用するなど、それぞれ生徒や学校の実態に合わせ指導方法を工夫し、検定を実施している様子が見える。さらに、検定は実施していないが、検定内容を授業の中に取り入れて指導している学校もあった。

④ 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）の目的や効果

検定4級の実施校・未実施校にかかわらず、検定によって「知識・技術が定着する」「合格により達成感・成就感が得られる」が約80%となっている。次に、「合格により自己肯定感が高まる」「生活の自立の一助となる」が約50%となっている。

次に多いのは「学習意欲が高まる」であるが、実施校は約45%である一方、未実施校30%弱であった。検定を実施することで、家庭科の学習全体の意欲にも関わってくる。

そして、何よりも「生活の自立の一助になる」という点は、検定受検のための準備や練習を含めた体験を伴って初めて知識と技術につながり、「できた」という喜びを通して、自己を見つめ、自信へとつながることが大きな効果と言える。

⑤ 家庭科技術検定（被服製作・食物調理）4級実施のための要望

検定4級の実施校・未実施校ともに事務手続きやWebページからの電子申請など書類作成の簡素化をあげているとともに、合格証書の本部事務局作成の要望もあった。実施収支報告書についてはゼロ会計が難しいことをあげている。

検定内容については、科目「家庭基礎」で挑戦できることや実用性のある作品の作成を要望している。また、4級と3級のレベルに差があることや3級から実施したいという回答もあった。

その他の要望として、実施校・未実施校ともに、検定の社会的評価・認知度を上げてほしい、検定料の値下げなどがあった。未実施校においては、指導者の負担、指導者への講習会実施などもあげられた。

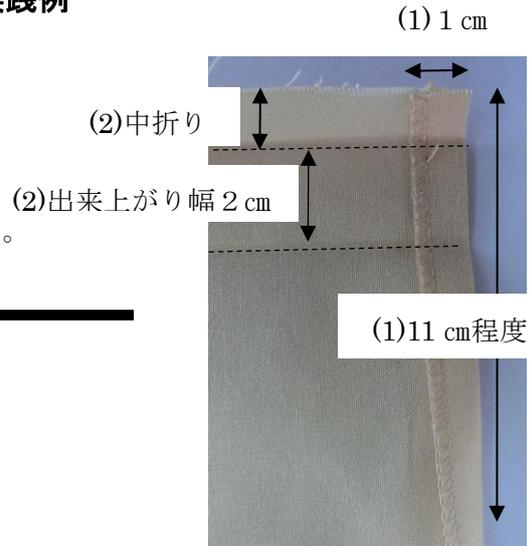
以上のことから家庭科技術検定を実施するに当たっては、検定4級の実施校・未実施校ともに書類作成、報告等事務手続きの簡素化を求めている。さらに技術検定内容の検討、社会的評価・認知度を上げるなどの要望が多くあった。

2 家庭科技術検定4級実施の工夫した取組実践例

(1) 被服製作技術検定

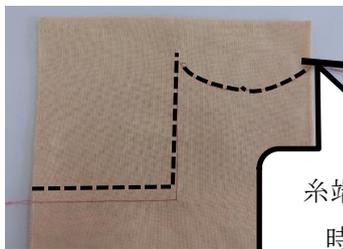
準備

- (1) 四隅を布端から 11 cm 程度まで 1 cm 折る。
- (2) 上下を中折り 1 cm、出来上がり幅 2 cm に折る。

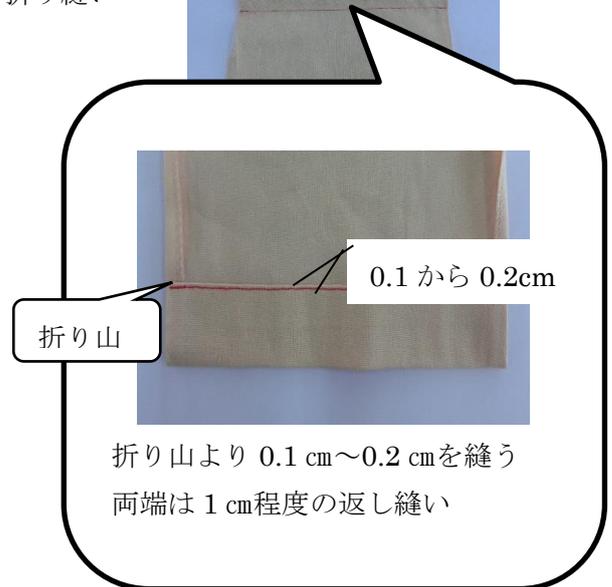


ミシン縫い

① 図案縫い

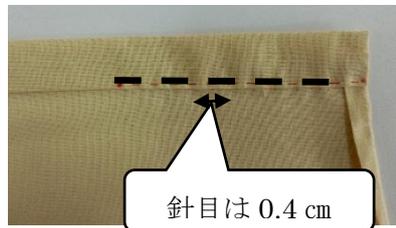


② 三つ折り縫い



手縫い

① なみ縫い



② まつり縫い



針目の間隔は 0.5 cm 程度、表目は 0.1 cm 程度
(玉止めは外に出ても良いが表に出さない)

③半返し縫い

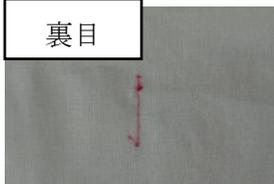


④ボタンつけ



糸足

裏目



3枚一緒に半返し縫い
裏目 0.6 cm 表返し目 0.2 cm

ポケット口から 0.5 cm 下につける
30番の糸 1本どりで 3回かけ、
糸足も 3回巻く

事後作業

- ①糸始末 アイロンかけ
- ②作品氏名票つけ

採点后

わき縫い・手縫いの補強 (ミシンまたは手縫い)



装飾してみよう (刺繍・アップリケ等)

本部で差し替え
予定



(2) 食物調理技術検定

① 練習方法

- i 姿勢や包丁の正しい持ち方を確認する
- ii 正しいきり方を提示する(好ましくない切り方や包丁の扱いも提示する)
- iii 目標(30秒で2ミリ以下の厚さで50枚)を明確に示し教員が師範する
その際、最初は「速さ」ではなく「正しいきり方」に重点を置く
- iv 生徒同士でペアを作り、一人が練習し相手が確認をする。
その際、タブレット等を活用しての動画撮影や上手な生徒によるデモも効果的である

② 記録

- i 切ったきゅうりの枚数を記録する表を一人ずつラミネートして作成し毎時間使う〔写真1〕
その際、記録の枠の隣に2ミリの幅をつけておく
- ii その日切った最高記録の枚数に日付シールを貼る〔写真2〕

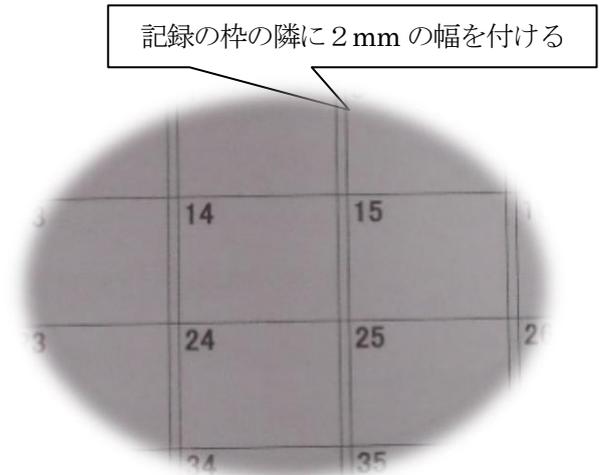
〔写真1-1〕



〔写真2-1〕

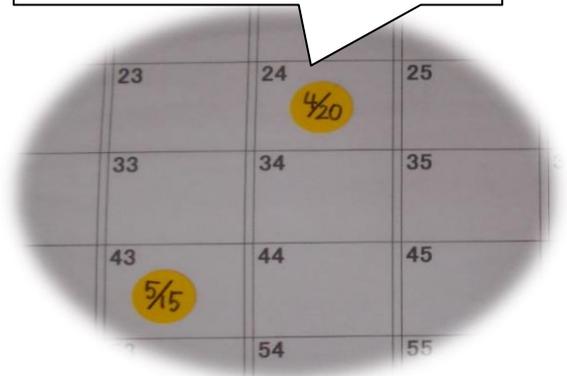


〔写真1-2〕



〔写真2-2〕

その日切った最高枚数の欄に日付シールを張る



③ 練習の工夫

- * 切れる包丁やしっかりしたまな板を使用する
- * 包丁の持ち方や姿勢が自己流になっていないかの確認を行う
- * リズムに合わせて切る
 - ア ペアの相手の手拍子に合わせて切る
 - イ メトロノームでリズムを作り、徐々にテンポを上げて切る
 - ウ 「もしもしカメよカメさんよ ♪〜」を歌いながらてんぽよく切り、徐々にスピードを上げる
- * 繰り返し練習する大切さを感じさせる

④ 検定の進め方

食物調理技術検定4級実践例（指定食品：きゅうり、切り方：半月切りの場合）

【準備するもの】

計 量：大さじ・小さじ各2本、すりきり用へら1本、小皿、指定調味料
計量カップ1、ボール1、玉じゃくし1、水

切り方：まな板、包丁、きゅうり、ストップウォッチ、皿、（評価シート）

事前準備：（計 量）ボールに水を入れ、調理器具を準備する。

（切り方）きゅうりを縦半分にして、準備する。（写真参照）



- 【計 量】
- ① 問題を裏向けて調理台に置く。
 - ② 「用意始め」の合図で問題を見させ、2分間計測する。
できたものは、皿の上に置かせる。（写真参照）



- 【切り方】
- ① 「用意始め」できゅうりを切らせ、30秒計測する。



- ② 切ったきゅうりを全て皿に入れ、評価シートに切れたきゅうりを置く。



※ 評価シートは、平成30年 愛知大会DVDの中にデータが入れてある。

IV まとめと提言

<家庭科技術検定（食物調理・被服製作）質の向上と受検者数の増加を目指して>

検定4級の実施校と未実施校において、家庭科技術検定（食物調理・被服製作）に取り組む目的や効果について再度確認した。「知識と技術が定着する」、「達成感や成就感が得られる」、「自己肯定感が高まる」、「生活自立の一助となる」、「学習意欲が高まる」などが挙げられ、受検の意義は大きい。しかし、ここ数年にわたり基礎となる4級受検者の減少率は大きく、平成元年のピーク時に比べ被服製作は6分の1、食物調理は3分1という状況である。

そこで、減少の原因として、検定4級受検の実施困難な理由と実施に向けた要望を把握し、そこから受検者数増加のための手立てについて以下の通りまとめた。

1 検定内容の質の向上とは

検定4級の目的を、生活の自立に必要な技能を身に付けたり、実生活への活用が図れたりできるような内容とし、生活の自立に必要な基礎基本技術に焦点化することが、質の向上につながるのではないかと考える。また、内容の高度化を図ることを質の向上と捉えるのではなく、実生活に必要な基礎基本技術の定着を評価し、合格の喜びを味わわせることが、生徒の受検意欲を湧かせ、魅力的な検定と捉えることになるのではないだろうか。生徒にとって、検定4級取得が生活自立のパスポートとなるような価値あるものに位置付けることを質の向上と捉え、受検者数増加につなげたいと考える。

2 検定内容の検討、見直し

被服製作4級の内容程度は、「ミシン操作、布地の基本的な扱いがわかり、ミシン縫いと手縫いの基本縫いができる。」とし、実技内容として「ミシン縫い・手縫いの基礎縫いをする。」である。また、食物調理4級の内容程度は、「調理の基礎である切り方・計量ができる。基本的な調理法の要点がわかる。」とし、実技内容として「切り方・計量・基礎知識」である。両検定とも「家庭基礎、家庭総合の学習を通して身についた基礎的技術を検定する」とある。このことは「家庭基礎」、「家庭総合」の学習内容の違いは配慮されていない。今回調査の要望にも「家庭基礎の範囲で受検」とあることから、4級の検定内容を検討する必要があると考える。

したがって、高等学校において共通教科家庭の科目「家庭基礎」の履修が多いであろうという現状を踏まえて基礎基本の技術を確認しつつ検定内容を検討することが必要であると考え。被服製作においては、検定時間・準備時間の短縮、内容の精査として、ミシンを使用しない、食物調理においては、検定時間・準備時間の短縮、内容の精査として、包丁の扱い方、切り方を検査するなど、技術検定本部委員会において見直し、早急に検討をお願いしたい。

3 社会的評価・認知度を上げる

上級学校や企業等への理解を深めるとともに、検定合格と進学・就職につながるよう実施校及び本部事務局において働きかける。また、家庭科技術検定の目的や意義、効果は、指導者も生徒も感じていることから、各学校で工夫して実施し検定の魅力を発信していただきたい。

4 指導者養成のための講習会の実施

指導方法や審査方法がわからないことに対しては、指導できる教員を育成するために講習会を行う必要がある。各都道府県理事校を中心に、評価の観点や技術的指導のポイントの伝達等についての講習会を実施し、参加者を増やすとともに指導者の養成を行う。

5 事務手続きと書類作成の簡素化

事務手続きや書類作成の簡素化については、本部事務局で対応していただき、Web ページからの電子申請や実施収支報告書等においても、少しでも負担が軽減できる方策の検討を要請したい。

おわりに

家庭科技術検定は知識や技術の習得だけでなく、学習意欲や挑戦しようという想い、思考力や判断力を高め、生活の自立や豊かな人間性をはぐくんでいると生徒も教師も感じることで魅惑がある。そして、そのために長い歴史の中で、検定の内容については実践しながら、課題を見つけ、改善しながらここまで進んできた。そして、休日やわずかな隙間の時間を使いながら、個別指導も含めて意欲ある生徒のために家庭科教員も努力している。そのようにして合格までに至った生徒は確実に自信となり、次の道への大きな一歩になっていること、仮に不合格の場合でも上位級に挑戦し、目標に向かって取り組んだことから確実な学びがあることも感じている。

今回の調査結果から、家庭科技術検定を実施しているか否かに関わらず、指導者である家庭科教員はその良さを認めているながら、実施できない理由が明らかにされる一方、工夫して取り組んでいる例も確認することができた。

特に基礎・基本である4級の内容は検定実施していなくとも、内容的に授業に組み入れながら、知識や技術を定着する指導は行っている様子が多くみられた。

一方、検定の実施困難な理由としては「時間不足」や「教員数の確保」「事務手続き」等で課題を感じている場合が多く、加えて未実施校では「指導方法が分からない」「必要性を感じていない」「書類作成が煩雑である」ということが挙げられた。

これらのことから、今後は検定内容の検討、教員の指導力向上に向けた取組みにより受検生の拡大ができるよう工夫していくこと、さらに、事務負担軽減の方策については一元化の本格実施とともに具体的な改善を探っていくことが必要とかがえる。

高校教育改革において、多面的な評価の推進がなされ、検定試験や民間検定の利活用の促進がうたわれている中で、この家庭科技術検定がより魅力的なものになり、生徒にとって目標となるようにしていくことで、より家庭科教育の充実・発展につながるものと確信している。

おわりに、アンケート調査にご協力いただきました校長先生をはじめ、各学校の家庭科担当の先生方に心より御礼を申し上げます。